宮澤賢治特有のオノマトペ － 慣習的オノマトペから音韻変化により派生した非慣習的オノマトペ －

田　守　育　啓

1　はじめに

日本語は、英語などのヨーロッパ諸言語と比べると、オノマトペに富んだ言語であると言われる。オノマトペは、法律の条文や契約書のような公文書に用いられることはめったにないが、日常会話だけでなく、新聞、雑誌、文学作品、広告のキャッチコピー、商品名等、様々なコンテクストにおいて幅広く使用されている。オノマトペは、基本的にその音の響きから得られる意味を表すので、感覚的なことばであるが、一般語彙よりも生き生きとした臨場感に溢れ、繊細かつ微妙な描写を可能にすることから、日本語にとって不可欠な言語要素であると考えられる。特に臨場感に溢れたビビッドな描写が求められる文学においては、オノマトペに勝ることばはないと思われる。しかしながら、オノマトペに対する評価は、文学者によって異なるようである。三島由紀夫(1959)は、擬音詞は女性や子供の文章に多い言語の堕落した形であって、抽象性に欠け、表現を類型化し卑俗にするので、みだりに使うべきでないと戒めており、オノマトペの魅力や価値を一切認めていない。対照的に、宮澤賢治は、オノマトペの魅力や価値を認めているだけでなく、彼の作品の中でオノマトペの魅力を最大限に生かしている。実際、井上ひさし(1984)は、宮澤賢治をオノマトペの優れた使い手として賞賛している。

賢治のどの作品をとっても、オノマトペが溢れており、オノマトペの魅力が賢治自身の特徴の一つであると言っても過言ではない。宮澤賢治がオノマトペの達人と目される理由は、彼のどの作品にもオノマトペが随所に適切かつ的確に用いられていて、しかも日本語として定着した、いわゆる慣習的なオノマトペだけでなく、実に想像力および創造力に富んだ、賢治独特のオノマトペが用いられているからである。賢治の非慣習的な独自の、いわゆる臨時のオノマトペは、1)音韻形態的に特殊なもの、2)慣習的なオノマトペの形態を、音の交替、挿入、反復といった音韻現象によって変化させたもの、3)慣習的なオノマトペの使い方が非慣習的であるもの、4)慣習的なオノマトペを構成している音の順序を入れ換えたもの、5)音韻形態は一般的であるが、オノマトペを構成している音の組み合わせ方が慣習的なオノマトペと異なり、まったく新しい独特のオノマトペ等に分類できる。[(1)] 本稿では、このような賢治独特の非慣習的なオノマトペのうち、2)の慣習的なオノマトペに基づいて、その形態を音韻的に変化させて派生したと仮定できる非慣習的なオノマトペにつ

いて詳しく考察する。[(2)]

2　慣習的なオノマトペ

マンガ本やコミックブックには、臨場感を持たせるために、実に多様な形態のオノマトペが用いられるが、特殊な形態を除けば、日本語オノマトペは大きく1モーラを基本形に持つものと、2モーラを基本形に持つものに分類できる（田守・スコウラップ（1999）、田守（2002））。以下では、このような音韻形態を持つ、日本語語彙として定着している慣習的なオノマトペについて検討する。このような一般的な音韻形態を持つ慣習的なオノマトペの具体例として、宮澤賢治が作品の中で実際に使っている例を、それぞれ1例ずつ以下に挙げる。

2.1　1モーラを基本形に持つもの

日本語オノマトペのもっともシンプルな形態は、(1)に挙げた「ふ」のような1モーラ（CV）だけで構成されているものである。[(3)]

（1）　CV
　　その時童子は<u>ふ</u>と水の流れる音を聞かれました。（雁の童子）

(1)のような、単に1モーラから成るオノマトペは稀で、通常、促音（Q）ないし撥音（N）が付いたCVQやCVNという形態のオノマトペが一般的である。

（2a）CVQ
　　はがきを<u>そっ</u>と学校のかばんにしまって、うちじゅうとんだりはねたりしました。（どんぐりと山猫）

（2b）CVN
　　「かささぎですねえ、頭のうしろのとこに毛が<u>ぴん</u>とのびていますから。」…（銀河鉄道の夜）

(2)のような1モーラに促音や撥音の付いた形態以外に、(3)のような母音が長音化されたCVVという形態も一般的である。

(3)　CVV

間もなくパリパリ呼子が鳴り汽缶車は一つポーとほえて、汽車は一目散に飛び出しました。(氷河鼠の毛皮)

また、(3)のCVVという形態に促音ないし撥音が付加されたと思われるCVVQやCVVNという形態のオノマトペも一般的である。

(4a) CVVQ

…あの赤い頬とみだれた赤毛とがちらっと見えたかと思うと、もうすうっと見えなくなって…(風の又三郎)

(4b) CVVN

そのとき外ではどうんと又一発陳氏ののろしがあがりました。(ベヂテリアン大祭)

(4a)の「すうっ」と(4b)の「どうん」は、それぞれCVVQとCVVNという形態をしており、(3)のCVVという形態に、それぞれ促音と撥音が付加されて派生したと考えられる。しかしながら、もう一つの可能性として、(2a)のCVQおよびCVNという形態から母音が長音化されて派生したとも考えられる。実際、「すっと見えなくなって」や「どんとのろしがあがりました」と言えるが、「*すうと見えなくなって」や「*どうとのろしがあがりました」と言えないことから明らかなように、(4a)の「すうっ」と(4b)の「どうん」は、両者とも(3)のCVVという形態ではなく、それぞれ(2a)のCVQと(2b)のCVNという形態から、母音が長音化されて派生したと考えられる。このように、CVVQやCVVNという形態を持つオノマトペは、一般にCVQやCVNから派生していることが多い。

さらに、1モーラを基本形に持つ形態として、(2a)のCVQ、(2b)のCVN、(3)のCVVが反復した形態も比較的一般的な形態である。

(5a) CVQ x 2

ところがカン蛙は一言も云わずに、すっすっとそこらを歩いたばかりです。(蛙のゴム靴)

(5b) CVN x 2

そのとき誰かうしろの扉をとんとんと叩くものがありました。(セロ弾きのゴーシュ)

(5c)　CVV x 2

…豚の足に縄をつけて、ひっぱって見るがいいやっぱり豚はキーキー云う。（ベヂテリアン大祭）

また、(5a) はCVQ全体が反復した形態であるが、CVQにCVだけが反復した形態も見られる。

(6)　CVQCV
一郎はしばらくそっちを見ていましたがやがて鞄をしっかりかかえてさっさと窓の下へ行きました。（風の又三郎）

2.2　2モーラの語基を持つもの

2モーラを語基に持つ形態は、日本語オノマトペの一般的な形態であるが、2モーラの語基だけで構成されているオノマトペは、珍しく(7)に挙げた例しか見つかっていない。

(7)　CVCV
ぴしゃというように鉄砲の音が小十郎に聞えた。（なめとこ山の熊）

(7)のように、2モーラだけで構成されているオノマトペは、現代日本語においては非常に稀で、通常、「オノマトペ標識（onomatopoeic marker）」と呼ばれる促音、撥音、「り」が付く（Waida（1986））。

(8a) CVCVQ
…シグナルは勿論シグナレスもまっ青になってぴたっとこっちへまげていたからだをまっすぐに直しました。（シグナルとシグナレス）

(8b) CVCVN
その時はもう博士の顔は消えて窓はガタンとしまりました。（ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記）

(8c) CVCVri
ネコはばかにしたように尖った長い舌をベロリと出しました。（セロ弾きのゴーシュ）

日本語オノマトペのもっとも典型的な形態は、2モーラの反復した形態であり、賢治の作品に頻繁に見られる。

(9)　CVCV x 2

「うん。」一郎はこたえましたが耕一はぷりぷり怒っていました。(風の又三郎)

また、(8a)のCVCVQ、(8b)のCVCVN、(8c)のCVCVriの反復した形態も比較的一般的で、賢治の作品に多数見られる。

(10a)CVCVQ x 2

その正面の青じろい時計は…カチッカチッと正しく時を刻んで行くのでした。(銀河鉄道の夜)

(10b)CVCVN x 2

…それにあまがえるは…ストンストンと投げつけられました。(カイロ団長)

(10c)CVCVri x 2

そこでまた一疋が、そろりそろりと進んで行きました。(鹿踊りのはじまり)

さらに、(8c)のCVCVriという形態の第1モーラの後に、促音ないし撥音が挿入された形態も非常に一般的である。

(11a)CVQCVri

にわかに男の子がぱっちり眼をあいて云いました。(銀河鉄道の夜)

(11b)CVNCVri

…西のそらが変にしろくぼんやりなってどうもあやしいと思っているうちに…(シグナルとシグナレス)

以上、1モーラを基本形に持つ形態、および2モーラを語基に持つ形態の慣習的なオノマトペについて概観し、賢治が作品の中で実際に用いている慣習的オノマトペをそれぞれ1例ずつ挙げた。

3　慣習的オノマトペから派生した非慣習的オノマトペ

本節では、前節で述べた形態を持つ慣習的な日本語オノマトペから、それに含まれている音を変化させたり、音を挿入したり、反復したりして、派生したと考えられる非慣習的なオノマトペについて検討する。このような賢治特有の非慣習的オノマトペとして、まず、子音交替を通して派生したと考えられるものが挙げられる。

3.1　子音交替

子音交替が関与していると思われる賢治特有のオノマトペには、慣習的なオノマトペを構成している有声子音を無声子音に変える無声化と、無声子音を有声子音に変える有声化の2種類の子音交替が見られる。

3.1.1　無声化

無声化を通して派生したと考えられる非慣習的なオノマトペには、次のようなものが見られる。

(12) g → k

貝の火兄弟商会の鼻の赤いその支配人はこくっと息を呑みながら…（楢ノ木大学士の野宿）

支那人はもうひとりでかぷっと呑んでしまいました。（山男の四月）

とのさまがえるは…足をふんばりましたが、おしまいの時は足がキクッと鳴ってくにゃりと曲がってしまいました。（カイロ団長）

山男はお酒をかぶりと呑んで云いました。（紫紺染について）

しきりにかぶりかぶりとお酒をのみました。（紫紺染について）

(12) に挙げたオノマトペは、語頭に/k/という無声子音を含んでいるが、現代日本語では、これらはいずれも慣習的なオノマトペと認識されないだろう。これらに対応すると思われる慣習的なオノマトペは、それぞれ「ごくっ」「がぶっ」「ギクッ」「がぶり」「がぶりがぶり」で、いずれも語頭に有声子音の/g/を持っている。したがって、「こくっ」といった(12)の非慣習的なオノマトペは、「ごくっ」といった慣習的なオノマトペから/g/ → [k]という無声化現象を通して派生したと考えられる。賢治がこのような無声化を意識して、意図的に(12)のような臨時オノマトペをつくったかどうかは、もちろん定かではない。なお、「かぷっ」については、/g/ → [k]という無声化に加え、第2モーラの有声子音/b/を[p]に変える/b/ → [p]という別の無声化現象が関与している。

では、賢治は、有声子音を持つ慣習的なオノマトペが存在しているにも関わらず、なぜあえて非慣習的なオノマトペを用いたのだろう。(12)の非慣習的なオノマトペとそれらに対応する慣習的なオノマトペは、基本的に同じ意味を表すと思われる。実際、日本語オノマトペには、「ごろごろ」「ころころ」のように、有声・無声のペアが数多く存在する。両者は基本的には同じ意味を表すが、微妙に異なる意味が示唆される。例えば、「ごろごろ」

と「ころころ」では、有声の「ごろごろ」の方が無声の「ころころ」よりも、関わっているものが大きいことが示唆される。このように、有声のオノマトペの方が無声のオノマトペよりも、関わっている音やものが大きかったり、関わっている動作がより活発であったり、関わっている動作や状態の程度がより激しかったりというようなニュアンスの違いがある(田守・スコウラップ(1999)、田守(2002))。このことを踏まえて、(12)の非慣習的なオノマトペの意味を考えてみると、いずれも関わっている動作が有声の慣習的なオノマトペほど活発でないことが示唆される。

次の例は、/b/ → [p]という無声化を通して派生したと考えられる非慣習的なオノマトペである。

(13) b → p

思わずくらげを<u>ぷらん</u>と手でぶら下げてそっちをすかして見ましたらさあどうでしょう。(サガレンと八月)

蟹にしておいたがね、<u>ぴしぴし</u>遠慮なく使うがいい。(サガレンと八月)

まっ赤な花が<u>ぷらぷら</u>ゆれて光っています。(チュウリップの幻術)

向う岸も、青じろく<u>ぼうっ</u>と光ってけむり、…(銀河鉄道の夜)

カン蛙は、けれども一本のたでから、<u>ピチャン</u>と水に飛び込んで、…(蛙のゴム靴)

(13)のオノマトペは、いずれも語頭に無声子音/p/を持っているが、現代日本語オノマトペとして定着していない非慣習的なオノマトペである。しかしながら、これらにはそれぞれに対応する、語頭に有声子音/b/を持つ、慣習的なオノマトペが存在する:「ぶらん」「びしびし」「ぶらぶら」「ぼうっ」「バチャン」。したがって、(13)の非慣習的なオノマトペは、慣習的なオノマトペの語頭の/b/を[p]に変える/b/ → [p]という無声化のプロセスを経て派生したと仮定できる。

語頭に無声子音を持つ(13)の非慣習的なオノマトペと、語頭に有声子音を持つ慣習的なオノマトペは、基本的にはほとんど同じ意味を表す。しかしながら、上述したように、両者には、有声・無声の対立に基づく微妙なニュアンスの違いが見られる。例えば、「ぷらぷらゆれて」と「ぶらぶらゆれて」を比べてみると、無声の「ぷらぷら」は、有声の「ぶらぶら」ほど揺れ方が激しくなく穏やかであることが示唆される。また、非慣習的な「ピチャン」は、慣習的な「バチャン」から派生したと考えられるが、語頭の/b/を[p]に無声化するだけでなく、母音/a/を[i]に変える母音交替現象も関わっている。この場合、有声・無声の対立と母音の対立により、非慣習的な「ピチャン」と慣習的な「バチャン」の微妙な意味的相違がより鮮明になっている。すなわち、一般に/a/は「大きい」という音象徴

的な意味を表すが、/i/は正反対の「小さい」という意味を表すと考えられている。実際、非慣習的な「ピチャン」が用いられている文の主語は「カン蛙」という小さい蛙で、それが水に飛び込んでも、その結果上がる水飛沫も小さいことが示唆される。

(14) b → h

とのさまがえるはホロホロ悔悟のなみだをこぼして、…(カイロ団長)

けれども会長さんももうへろへろ酔っていたのです。(紫紺染について)

(14)のオノマトペ「ホロホロ」と「へろへろ」は、いずれも語頭に/h/という無声子音を持っているが、これらはそれぞれのコンテクストにおいては、慣習的なオノマトペと認識されないだろう。通常、「ホロホロ」については、語頭に有声子音/b/を持つ「ボロボロ」ないし無声子音/p/を持つ「ポロポロ」が、そして「へろへろ」については、語頭に有声子音/b/を持つ「べろべろ」が用いられる。

日本語においては、風の音を描写するオノマトペとして、「びゅうびゅう」「ぴゅうぴゅう」「ひゅうひゅう」の3種類があり、/b/は/p/だけでなく/h/とも交替する。風の強さは「びゅうびゅう」が一番強く、「ひゅうひゅう」が一番弱く、/b/ > /p/ > /h/という順序である。風の音を表すオノマトペには、語頭に/b/ /p/ /h/を持つ3種類の慣習的なオノマトペが存在するが、すべてのオノマトペにこの3種類が全部備わっているわけではなく、その種類および数はオノマトペによって異なる。「涙をこぼす」という動作を描写する慣習的なオノマトペには、「ぼろぼろ」と「ぽろぽろ」の2種類があるが、「酔っている」という状態を描写する慣習的なオノマトペには、「べろべろ」しか存在しない。なお、(14)の「へろへろ酔っていた」という表現は、「べろべろに酔っていた」のように、オノマトペに助詞「に」を義務的に伴わなければならない。したがって、このような「に」を伴わない、統語的に逸脱した表現も、賢治独特の用法であると言える。

(15) z → s

水がさあさあ云っている。(台川)

(15)のオノマトペ「さあさあ」も、語彙化された慣習的なオノマトペとは見なされないだろう。(15)のような例では、通常、語頭に有声子音/z/を持つ、慣習的な「ざあざあ」が用いられる。したがって、賢治独特の非慣習的な「さあさあ」は、慣習的な「ざあざあ」から、語頭の有声子音/z/を無声子音[s]に変える/z/ → [s]という無声化現象を通して派生したと考えられる。無声の「さあさあ」という非慣習的なオノマトペを用いることによって、

関わっている水の量や音が慣習的な「ざあざあ」よりも、少なく小さいことが示唆される。

3.1.2　有声化

無声化と正反対の音韻現象は、無声音を有声音に変える有声化であるが、このような現象が関わっていると思われる非慣習的なオノマトペが、賢治の作品の中にいくつか見られる。

(16) k → g
時計ががちっと鳴りました。(耕耘部の時計)

(16)の「がちっ」は、日本語語彙として定着したオノマトペであるが、当該例文においては非慣習的であると思われる。すなわち、有声子音/g/を持つ「がちっ」は、「鍬が石に当ったようでがちっと鳴った」のように、金属などの硬いもの同士がぶつかったときに生ずる音を表すのに用いられるが、時計の針が動くときに生ずる音を表すのには用いられない。この時計の針が動く時の音を描写する慣習的なオノマオトペは、無声子音/k/で始まる「かちっ」である。したがって、語頭に/g/を持つ非慣習的なオノマトペ「がちっ」は、/k/を持つ「かちっ」という慣習的なオノマトペから、/k/ → [g]という有声化現象を通して派生したと仮定できる。

無声子音で始まる慣習的なオノマトペと、有声子音で始まる非慣習的なオノマトペは、上で述べたように、基本的には非常によく似た意味を表し、有声・無声の対立に起因する微妙なニュアンスの違いだけが示唆される。例えば、「がちっ」は、例えば柱時計のような大きな時計の針が動くときに発する比較的大きな音を連想させる。

(17) p → b
そうすると、魚はみんな毒をのんで、口をあぶあぶやりながら、白い腹を上にして浮かびあがるのです。(毒もみのすきな署長さん)

(17)の有声子音/b/を含む「あぶあぶ」は、日本語オノマトペとして定着したオノマトペではなく、通常、無声子音/p/を含む「あぷあぷ」という慣習的なオノマトペが用いられる。したがって、(17)の「あぶあぶ」は、「あぷあぷ」から/p/を[b]に変える/p/ → [b]という有声化規則を適用して派生したと考えられる。この非慣習的なオノマトペは、慣習的な「あぷあぷ」よりも口を激しく、しかも大きく開閉させている様子を連想させる。

以上、慣習的なオノマトペから無声化と有声化を通して非慣習的なオノマトペが派生し

たと仮定できることを見たが、この無声化・有声化現象はk ⇔ gやp ⇔ bといった閉鎖音に特に顕著に見られる。

3.1.3　硬口蓋化

次に、慣習的なオノマトペから非慣習的なオノマトペを派生したと仮定できる音韻変化として、硬口蓋化現象が挙げられる。

(18) s → ʃ
どの幽霊も青白い髪の毛がばしゃばしゃで…（畑のへり）

(18)の「ばしゃばしゃ」は定着した慣習的なオノマトペであるが、水飛沫の音ないし水飛沫を上げる様態を描写する以外には用いられない。したがって、(18)では「ばしゃばしゃ」の使い方が非慣習的であると言える。日本語には、「髪の毛が乱れている状態」を描写する「ばさばさ」という慣習的なオノマトペが存在する。このことから、非慣習的な「ばしゃばしゃ」が慣習的な「ばさばさ」から、歯摩擦音の/s/を硬口蓋歯茎摩擦音の[ʃ]に変える硬口蓋化を経て派生したと仮定できる。賢治が「ばさばさ」ではなく、あえて非慣習的な「ばしゃばしゃ」を用いたのは、「ばさばさ」が描写する「髪の毛の乱れた状態」よりも、もっとひどいことを表したかったのではないかと推察される。

(19) s → tʃ
タイチは髪をばちゃばちゃにして口をびくびくまげながら…（氷河鼠の毛皮）

(19)の「ばちゃばちゃ」も、(18)の「ばしゃばしゃ」と同様、水飛沫の音ないし水飛沫を上げる様態を描写する慣習的なオノマトペである。しかしながら、このオノマトペも「髪の毛の乱れた状態」を描写するのには用いられない。したがって、(19)のような形で用いられている「ばちゃばちゃ」は非慣習的であり、慣習的な「ばさばさ」から歯摩擦音の/s/を硬口蓋歯茎破擦音の[tʃ]に変える硬口蓋化を経て派生したと仮定できる。「ばちゃばちゃ」も「ばしゃばしゃ」同様、「ばさばさ」よりも髪の乱れ方がひどい状態を表すと推察される。

3.1.4　破擦音化

さらに、慣習的なオノマトペから非慣習的なオノマトペを派生する音韻現象として、破擦音化が挙げられる。

(20) ʃ → tʃ

ツェ鼠はプイッと中へはいって、むちゃむちゃと半ぺんをたべて、…（「ツェ」ねずみ）

(20)の「むちゃむちゃ」は、日本語語彙として定着した慣習的なオノマトペと見なせないだろう。この非慣習的なオノマトペに相当すると思われる慣習的なオノマトペは「むしゃむしゃ」である。したがって、「むちゃむちゃ」が「むしゃむしゃ」から、摩擦音の/ʃ/を破擦音の[tʃ]に変える/ʃ/ → [tʃ]という破擦音化現象を通して派生したと仮定される。慣習的な「むしゃむしゃ」も下品な食べ方を描写するが、非慣習的な「むちゃむちゃ」は、より下品な食べ方を連想させる。

ちなみに、(19)の非慣習的な「ばちゃばちゃ」は、慣習的な「ばさばさ」から硬口蓋化を経て派生したと仮定できると述べたが、硬口蓋化だけでは/s/が[ʃ]になるだけで「ばしゃばしゃ」しか派生しない。実際には、硬口蓋化と破擦音化の二つの音韻現象が同時に起こっている。

3.1.5　摩擦音化

賢治が使っている独特の非慣習的なオノマトペを、慣習的なオノマトペから派生する別の音韻現象として、摩擦音化を挙げることができる。

(21) p → h

…あらんかぎり首を延ばしてふんふん嗅いでいましたが、…（鹿踊りのはじまり）

(21)の「ふんふん」は慣習的なオノマトペであるが、昔は臭いを嗅ぐさまを表すのにも用いられていたようであるが、現代日本語においては、「他人の言うことに同意してうなずくさま」を表すのに用いられ、臭いを嗅ぐさまを表すのには用いられない。現代日本語では、「ふんふん」ではなく「ぷんぷん」が用いられる。したがって、「ふんふん」は「ぷんぷん」から、閉鎖音の/p/を摩擦音の[h]に変える摩擦音化現象を通して派生したと仮定できる。

3.1.6　非硬口蓋化

さらに、賢治が使っている非慣習的なオノマトペを慣習的なオノマトペから派生する音韻現象として、非硬口蓋化が見られる。

(22) ny → n

…空の桔梗のうすあかりには、山どもがのっきのっきと黒く立つ。(楢ノ木大学士の野宿)

(22)の「のっきのっき」というオノマトペが定着した語彙でないことは明らかである。この非慣習的なオノマトペに対応すると考えられる慣習的なオノマトペは「にょきにょき」である。「のっきのっき」と「にょきにょき」を比べてみると、まず鼻音が異なっている。すなわち、前者の鼻音は歯茎鼻音/n/であるが、後者の鼻音は硬口蓋鼻音/ɲ/である。もう一つの相違点は、前者には促音が含まれているが、後者には含まれていない。このことから、非慣習的な「のっきのっき」は、慣習的な「にょきにょき」から、硬口蓋鼻音/ɲ/を歯茎鼻音[n]に変える非硬口蓋化、および促音挿入を経て派生したと仮定できる。

3.2 母音交替

慣習的なオノマトペに含まれている母音を別の母音に変化させて、非慣習的なオノマトペが派生したと考えられる例が、賢治の作品に多数見られる。

(23) u → o

三疋はぽかぽか流れて行くやまなしのあとを追いました。(やまなし)

男は…一生けん命口の中で何かもにゃもにゃ云っていました。(祭の晩)

…事務長の黒猫が、もしゃもしゃパンを喰べながら笑って云いました。(寓話　猫の事務所)

(23)の「ぽかぽか」「もにゃもにゃ」「もしゃもしゃ」は、それぞれのコンテクストにおいて「ぷかぷか」「むにゃむにゃ」「むしゃむしゃ」という慣習的なオノマトペと対応しており、通常、このような慣習的なオノマトペが用いられると考えられる。したがって、(23)の非慣習的なオノマトペは、それぞれに対応する慣習的なオノマトペから、母音/u/を[o]に変化させて派生したと仮定できる。慣習的な「むにゃむにゃ」と非慣習的な「もにゃもにゃ」を例にとって、この母音交替による音象徴効果について考えてみると、両者とも不明瞭な話し方を描写するが、[o]を含む「もにゃもにゃ」の方がより不明瞭な感じを受ける。このことは、「もぐもぐ」「もごもご」「もじもじ」「もさもさ」「もそもそ」「もたもた」「もやもや」「もぞもぞ」といった「も」で始まるオノマトペが、いずれも「不明瞭さ」と何らかの形で関連していることから支持されよう。このように、賢治は「非常に不明瞭な話

し方であること」を強調したいがために、あえて「もにゃもにゃ」という非慣習的なオノマトペを使ったと推察される。

(24) u → i

めくらぶどうは、まるでぶなの木の葉のようにプリプリふるえて、輝いて、いきがせわしくて思うように物が云えませんでした。(めくらぶどうと虹)

少女のギルダは、まるでぶなの木の葉のようにプリプリふるえて、輝いて、いきがせわしくて思うように物が云えない。(マリヴロンと少女)

(24)の「プリプリ」は慣習的なオノマトペであるが、その用法としては、「プリプリ怒る」やプリンなどの弾力のあるものが、「プリプリ揺れる」といった使われ方をする。(24)の例のように、「プリプリふるえる」という用法は非慣習的であると考えられ、通常、「プルプルふるえる」と言うだろう。したがって、(24)の「プリプリ」は、ふるえるという動詞と共起する慣習的な「プルプル」から、/u/ → [i]という母音交替を通して派生したと考えられる。もちろん、別の解釈として、慣習的な「プリプリ」の動詞との共起制限を破って、その意味範囲を拡大したとも考えられる。

(25) u → e

殊に狸はなめくじの話が出るといつでもヘンと笑って云いました。(寓話　洞熊学校を卒業した三人)

(25)の「ヘン」は、日本語として定着していない非慣習的なオノマトペである。(25)のコンテクストでは、慣習的な「フン」が用いられる。したがって、非慣習的な「ヘン」は「フン」から、/u/ → [e]という母音交替を経て派生したと仮定できる。

(26) a → o

けれどもぼくは、…やっぱりぽくぽくそれをたべていました。(銀河鉄道の夜)

杜に帰って烏の駆逐艦は、みなほうほう白い息をはきました。(烏の北斗七星)

(26)のオノマトペは、いずれもそれぞれのコンテクストにおいては、非慣習的な使われ方をしていて、通常、それらに代わり、慣習的な「ぱくぱく」「はーはー」が用いられると思われる。したがって、(26)の非慣習的なオノマトペは、それぞれに対応する慣習的なオノマトペから、/a/ → [o]というプロセスを経て派生したと仮定できる。なお、「ほうほ

う」に含まれている「う」は、標記上「う」と標記されているだけで、実際には[u]と発音されるのではなく、単に母音の長音化を表す。したがって、「ほうほう」は「ほーほー」と同一であると見なされる。

ここで、[o]を含む非慣習的なオノマトペと、[a]を含む慣習的なオノマトペの音象徴効果について検討してみよう。まず、「ぽくぽく」と「ぱくぱく」を比較してみると、慣習的な「ぱくぱく」は、口を大きく開けて活発に食べるさまを表すが、非慣習的な「ぽくぽく」は、口をあまり開けないで食べるさまを連想させる（筧（1993））。同様に「ほうほう」は、「はーはー」ほど大きく口を開けないで息を吐くさまを連想させる。

（27）a → e

とうとう三疋共頭が<u>ペチン</u>と裂けたことでも何でもすっかり出ているのでした 。（クンねずみ）

（27）の「ペチン」は、明らかに日本語オノマトペとして定着した語彙ではない。この非慣習的なオノマトペに対応すると考えられる慣習的なオノマトペは「パチン」である。したがって、非慣習的な「ペチン」は、「パチン」から/a/ → [e]という母音交替を経て派生したと仮定できる。「ペチン」と「パチン」を比べてみると、前者の方が後者よりも関わっているものが小さいと感じられる。実際、この例文の主語は「むすめねずみの頭」で、このような小さなものが裂ける音ないし動作を描写するには、「パチン」よりも「ペチン」の方が、より適切に表現できると、賢治は考えたのだろう。

（28）a → i

とのさまがえるは次の室の戸を開いてその閉口したあまがえるを押し込んで、戸を<u>ぴたん</u>と閉めました。（カイロ団長）

ここの環の所へ足を入れると<u>ピチン</u>と環がしまって、もうとれなくなるのです。（茨海小学校）

（28）の「ぴたん」および「ピチン」は、日本語として定着した慣習的なオノマトペと見なされないだろう。（28）のコンテクストにおいてこれらの非慣習的なオノマトペに対応すると考えられる慣習的なオノマトペは、それぞれ「ぱたん」/「ぴたっ」および「パチン」/「ピチッ」である。「ぴたん」は「ぱたん」が表すイメージを維持しつつ、「ぴたっ」が表す「ものが隙間なくくっつくさま」を同時に描写したいと考えて、「ぱたん」と「ぴたっ」を組み合わせて「ぴたん」という非慣習的なオノマトペがつくられたのではないかと推察

される。同様に「ピチン」も、「パチン」と「ピチッ」が持つ意味を同時に表そうとして、この二つのオノマトペを組み合わせてつくられたのではないかと考えられる。したがって、(28)の「ぴたん」と「ピチン」が、それぞれ「ぱたん」と「パチン」から派生したと仮定すれば、/a/ → [i]という母音交替が関わっていることになる。一方、「ぴたん」と「ピチン」がそれぞれ「ぴたっ」および「ピチッ」と関連していると仮定すれば、「ぴた」「ピチ」という語基に撥音を付加して、非慣習的な「ぴたん」「ピチン」がつくられたと考えられる。

(29) a → u

それにひどく深くて急でしたからのぞいて見ると全く<u>くるくる</u>するのでした。(谷)

私はちらっと下を見ましたがもう<u>くるくる</u>してしまいました。(谷)

「多分ひばりでしょう。ああ頭が<u>ぐるぐる</u>する。お母さん。まわりが変に見えるよ。」(貝火)

もうだめだ、おしまいだ。しくじったと署長は思いました。そしてもうすっかり<u>ぐるぐる</u>して壇を下りてしまいました。(税務署長の冒険)

(29)の「くるくる」および「ぐるぐる」は、共に慣習的なオノマトペであるが、「くるくるする」や「ぐるぐるする」という動詞は、定着した慣習的表現と見なされないだろう。(29)のコンテクストにおいて「くるくるする」と「ぐるぐるする」に対応する慣習的な表現は、「くらくらする」と「ぐらぐらする」であると考えられる。したがって、(29)の非慣習的な「くるくるする」と「ぐるぐるする」は、それぞれ慣習的な「くらくらする」と「ぐらぐらする」から、/a/ → [u]という母音交替プロセスを経て派生したと仮定できる。

「くるくる」と「ぐるぐる」は「何かが回るさま」を表し、「くらくら」と「ぐらぐら」は「何かが揺れるさま」を表す。このように両者は基本的に比較的よく似た意味を表す。両者の違いは、「－する」という動詞の一部として用いることができるかどうかという統語的な違いである。上で見たように、「くるくる」と「ぐるぐる」は、「－する」という動詞として用いることはできないが、「くるくる目が回る」や「ぐるぐる目が回る」のように、副詞として用いることができ、「頭がくらくらする」や「頭がぐらぐらする」とよく似た意味を表す。したがって、(29)の「くるくるする」や「ぐるぐるする」は、それぞれ「くるくる」「ぐるぐる」に、動詞語尾「－する」を付加して派生したという可能性も考えられる。

(30) i → e

…蝋燭の火のように光ったり又消えたり<u>ぺかぺか</u>しているのを見ました。(光の素足)

そしてジョバンニは…しばらく蛍のように、ぺかぺか消えたりともったりしているのを見ました。（銀河鉄道の夜）
すると鷺は、蛍のように、袋の中でしばらく、青くぺかぺか光ったり消えたりしていましたが、…（銀河鉄道の夜）

（30）の「ぺかぺか」は慣習的なオノマトペではなく、通常、（30）のようなコンテクストでは、慣習的な「ぴかぴか」が用いられる。したがって、非慣習的な「ぺかぺか」は、慣習的な「ぴかぴか」から/i/ → [e]という母音交替によって派生したと考えられる。筧（1993）が指摘しているように、「ぺかぺか」は「ぴかぴか」よりも弱い光を描写している印象を与える。この両者の微妙な意味の違いは、両者が含んでいる母音の違いに起因する。Hamano（1998）によると、/i/は「弦をピンと張る」や「ぴっと笛を吹く」のように、線ないし一直線に伸びたものや甲高い音を表す。このような音象徴的な意味を表す母音/i/を含む「ぴかぴか」は「線」という意味と関連しており、鮮明かつシャープなイメージを与える。一方、/e/は「げーげー」「けらけら」のように、不適切さや下品さを表し、「ぺかぺか」は「ぴかぴか」ほど鮮明で強い光り方を表さないと思われる。

（30）の「ぺかぺか」は、慣習的な「ぴかぴか」から/i/ → [e]という母音交替によって派生したと考えられると述べたが、川越（2008）によると、「ぺかぺか」は岩手方言のオノマトペで、「消えることに特徴を持つ光」を表すのに用いられるそうである。実際、（30）の例は、いずれも光ったり消えたりする、点滅する光り方を描写するのに用いられている。

（31）が示すように、賢治は、「ぺかぺか」と共に慣習的な「ぴかぴか」も彼の作品に用いている。

（31）びっくりして屈んで見ますと、草のなかに、あっちにもこっちにも、黄金いろの円いものが、ぴかぴかひかっているのでした。（どんぐりと山猫）
二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲をかついで、…（注文の多い料理店）
木なんかみんなザラメを掛けたように霜でぴかぴかしています。（雪渡り）
ニッケル鍍金でこんなにぴかぴか光っています。（茨海小学校）
先生はぴかぴか光る呼子を右手にもってもう集れの支度をしているのでしたが、…（風の又三郎）

（31）から明らかなように、「ぴかぴか」は、いずれも光ったり消えたりする、点滅する光り方を描写しているのではなく、連続して光っている状態を描写するのに用いられてい

る。このことから、共通語では、連続して光っている状態も点滅した光り方も「ぴかぴか」というオノマトペで描写されるが、岩手方言では、前者の光り方を描写するのに「ぴかぴか」が、後者の光り方を描写するのに「ぺかぺか」が用いられることのようである。

(32) i → a

実際それを一ぱいとることを考えると胸がどかどかするのでした。(谷)

タネリは、やどり木に何か云おうとしましたが、あんまり走って、胸がどかどかふいごのようで、どうしてもものが云えませんでした。(タネリはたしかにいちにち噛んでいたようだった。)

けれども又じっとその鳴って吠えてうなってかけて行く風をみていますと今度は胸がどかどかなってくるのでした。(風の又三郎)

間もなくパリパリ呼子が鳴り汽缶車は一つポーとほえて、汽車は一目散に飛び出しました。(氷河鼠の毛皮)

(32)の「どかどか」は慣習的なオノマトペであるが、通常、「大勢の人がどかどか家に入ってきた」のような使われ方をして、「胸がどかどかする」という慣習的な表現はない。この非慣習的な表現に対応する慣習的な表現は「胸がどきどきする」である。したがって、(32)の「どかどか」は、いずれも慣習的なオノマトペ「どきどき」から、/i/ → [a]という母音交替を経て派生したと仮定できる。この非慣習的な「どかどか」は、「全体」や「外への拡がり」という音象徴的意味を表す/a/を含んでいるので、いずれの場合においても慣習的な「どきどき」よりも、胸の高鳴りが激しい興奮した状態を描写すると考えられる。[(4)] もちろん、「どかどか」という慣習的なオノマトペの意味範囲および用法を拡大したとも解釈できる。すなわち、「どかどか」は、それがカバーする意味範囲を拡大し、「胸の高鳴り」を描写するのにも用いられ、さらにそのような状態を表すのに、その用法を拡大して、「どかどかする」という動詞の一部としても用いたと考えることも可能であろう。

「パリパリ」は慣習的なオノマトペであるが、(32)のようなコンテクストで用いられることはなく、非慣習的な使い方であると言える。(32)のコンテクストでは、通常、慣習的なオノマトペ「ピリピリ」が用いられる。したがって、その使用法において非慣習的である「パリパリ」は、「ピリピリ」から、/i/ → [a]という母音交替を経て派生したと仮定できる。

(33) i → u

「みなさんお早う。どなたも元気ですね。」と云いながら笛を口にあててピルルと吹きました。(風野又三郎)

先生はちらっと運動場中を見まわしてから「ではならんで。」と云いながらプルルッと笛を吹きました。（風の又三郎）

(33)の「ピルル」および「プルルッ」は、いずれも非慣習的なオノマトペであり、それぞれ「ピリリ」と「ピリリッ」に対応していると考えられる。したがって、これらの非慣習的なオノマトペは、それぞれ「ピリリ」と「ピリリッ」から、/i/ → [u]という母音交替を経て派生したと仮定できる。

(34) o → u

雪童子はわらいながら、手にもっていたやどりぎの枝を、ぷいっと子どもになげつけました。（水仙月の四日）

(34)の「ぷいっ」は慣習的なオノマトペであるが、「不機嫌に顔をそむけたり、急に立ち去ったりするさま」を表すのに用いられる。現代日本語では、「ぷいっ」は(31)のコンテクストでは用いられず、「ぽいっ」が用いられるのが普通である。したがって、非慣習的な用法である(31)の「ぷいっ」は、慣習的な「ぽいっ」から/o/ → [u]という母音交替を通して派生したと考えられる。

(35) o → a

…チャキチャキ鳴る鋏の銀の影をながめて居りました。（毒蛾）
全く峯にはまっ黒のガツガツした巌が冷たい霧を吹いて…（マグノリアの木）
それでもやっぱりキッコはにかにか笑って書いていました。（みじかい木ペン）
…阿部時夫などが、今日はまるでいきいきした顔になってにかにかにかにか笑っています。（イーハートーボ農学校の春）
キッコはもう大悦びでそれをにがにがならべて見ていましたがふと算術帳と理科帳と取りちがえて書いたのに気がつきました。（みじかい木ペン）
キッコはもうにがにがにがにがわらって戻って来ました。（みじかい木ペン）

(35)の「チャキチャキ」は、(35)のコンテクストでは慣習的なオノマトペと見なされないだろう。(35)のコンテクストに相応しい慣習的なオノマトペは「チョキチョキ」である。「ガツガツ」は慣習的なオノマトペであるが、その使われ方は、「がつがつ食べる」のような表現に限られていて、「ガツガツした巌」のような使われ方は慣習的ではなく、意味的に逸脱した使われ方である。慣習的な表現としては「ゴツゴツした巌」が考えられる。「に

かにか」「にかにかにかにか」「にがにが」「にがにがにがにが」は、共通語では慣習的なオノマトペと見なされないだろう。これらはいずれも慣習的な「にこにこ」と表現される。したがって、(35)の非慣習的なオノマトペは、いずれも慣習的なオノマトペから、/o/ → [a]という母音交替を経て派生したと考えられえる。

「チャキチャキ」からは、「チョキチョキ」よりも音が外に拡がっていくニュアンスが感じられる。また、非慣習的な「ガツガツ」は、慣習的な「ゴツゴツ」よりも凹凸が激しく角ばった印象を与えると思われる。

「にかにか」に関して、小野(2007)は、「主人はだまってしばらくけむりを吐いてから顔の少しでにかにか笑ふのをそっとかくして云ったもんだ(なめとこ山の熊)」を例に挙げて、「にかにか」は、「思惑ありげに笑うさま」を描写すると述べているが、(35)の例からは、そのようなニュアンスは得られず、何かいいことがあってそのうれしさを前面に表そうとした笑い方を描写すると思われる。特に「にかにかにかにか」からは、このようなニュアンスが読み取られ、2モーラ反復形の「にかにか」をさらに繰り返すことによって、「うれしさ」や「明るさ」が強調されているように感じられる。なお、「にかにか」に対応する「にがにが」は、有声子音/g/を含んでいるため、「にかにか」よりもネガティブなニュアンスを与えている。

川越(2008)によると、「にかにか」「にがにが」は『聴耳草紙』という岩手県の民話集に見られ、「にかにか」という項目が秋田県教育委員会編の『秋田のことば』に記載されていることから、東北方言のオノマトペだそうであるが、「にかにか」は、「にやにや」のようなマイナスのイメージではなく、「にこにこ」に相当する、プラスのイメージの笑い方を描写すると捉えた方がよいと述べている。なお、「にかにか」と「にがにが」の違いについて、島(1960)は、「にかにか」には「晴れやかさ」があるのに対し、「にがにが」は「少しおさえた気分」と説明している(川越(2008)参照)。

(36)が示すように、賢治は、方言である「にかにか」と共に、共通語である「にこにこ」も彼の作品に用いているが、両者を意識的に区別していたかどうか定かではない。

(36) そして虔十はまるでこらえ切れないようににこにこ笑って兄さんに教えられたように今度は北の方の堺から杉苗の穴を堀りはじめました。(虔十公園林)
王様は白い長い髯の生えた老人でにこにこわらって云いました。(双子の星)
ペンクラアネイ先生もにこにこ笑って斯う云った。(三人兄弟の医者と北守将軍[韻文形])
おっかさんがにこにこして、おいしい白い草の根や青いばらの実を持って来て云いました。(貝の火)

とのさまがえるは、よろこんで、にこにこにこにこにこ笑って、棒を取り直し、片っぱしからあまがえるの緑色の頭をポンポンポンポンたたきつけました。（カイロ団長）

(37) o → e
「いや、ありがとう、ウーイ、ケホン、ケホン、ウーイうまいね。どうも。」（カイロ団長）

(37)の「ケホン」は明らかに非慣習的なオノマトペであり、それに対応すると考えられる慣習的なオノマトペは「コホン」である。したがって、「ケホン」は「コホン」から、/o/ → [e]という母音交替を経て派生したと考えられる。

(38) e → a
ごくとしよりの馬などは、わざわざ蹄鉄をはずされて、ぼろぼろなみだをこぼしながら、その大きな判をぱたっと証書に押したのだ。（フランドン農学校の豚）

(38)の「ぱたっ」は慣習的なオノマトペであるが、通常、「ぱたっとドアが閉まった」のように使われ、(38)のようなコンテクストでは用いられないので、賢治独特の非慣習的な用法と考えられる。(38)のコンテクストでは、「ぺたっ」がもっとも相応しい慣習的なオノマトペである。したがって、(38)の「ぱたっ」は「ぺたっ」から、/e/ → [a]という母音交替を経て派生したと仮定できる。慣習的な「ぺたっ」があるにも関わらず、賢治はなぜあえて非慣習的な用法である「ぱたっ」を使ったのだろう。それは、大きな判ということを適切に表現したいがために、「全体」という概念を象徴的に表す母音/a/を含む「ぱたっ」を使ったと思われる。

3.3　モーラ交替

3.1および3.2では、慣習的なオノマトペから非慣習的なオノマトペが派生したと考えられる音韻現象として、子音の無声化・有声化および母音交替について考察したが、このような音韻現象として、モーラ交替も挙げられる。

(39) pyo → pu
大砲をうつとき、片脚をぷんとうしろへ挙げる艦は、…（烏の北斗七星）

(39)の「ぷん」は慣習的なオノマトペであるが、現代日本語では、(39)のコンテクストにおいて用いることはなく、このような使われ方は賢治独特の非慣習的な用法である。通常、(39)では慣習的な「ぴょん」が用いられる。したがって、非慣習的な「ぷん」は、慣習的な「ぴょん」から/pyo/ → [pu]というモーラ交替を経て派生したと仮定できる。

(40) kyo → ki
その人は大へん皮肉な目付きをして式場全体をきろきろ見下ろしてから云いました。(ベジテリアン大祭)

(40)の「きろきろ」は、現代日本語では定着した慣習的なオノマトペと見なされないだろう。(40)のコンテクストでは、明らかに「きょろきょろ」という慣習的なオノマトペが用いられる。したがって、非慣習的な「きろきろ」も、慣習的な「きょろきょろ」から、/kyo/ → [ki]というモーラ交替を経て派生したと仮定できる。

(41) gyo → gi
…大きな眼をぎろぎろ空に向けしきりに口をぱくぱくして…(楢ノ木大学士の野宿)

(41)の「ぎろぎろ」も、(40)の「きろきろ」同様、現代日本語では定着した慣習的なオノマトペではない。(41)の非慣習的な「ぎろぎろ」に対応する慣習的なオノマトペは、「ぎょろぎょろ」と考えられる。このことから、「ぎろぎろ」は「ぎょろぎょろ」から、/gyo/というモーラを[gi]というモーラに変えて派生したと考えられる。

(42) kyu → ki
仕立おろしの紺の背広を着、赤革の靴もキッキッと鳴ったのです。(土神ときつね)

(42)の「キッキッ」は、慣習的なオノマトペであるが、サルの鳴き声を描写する以外には用いられない。(42)のコンテクストにおける「キッキッ」の使用は、明らかに賢治独特のもので慣習的ではない。通常、(42)においては「キュッキュッ」という慣習的なオノマトペが用いられる。したがって、非慣習的な「キッキッ」は、「キュッキュッ」から/kyu/ → [ki]というモーラ交替プロセスを経て派生したと仮定される。

(43) bi → do

最想像に困難なのは、豚が自分の平らなせなかを、棒でどしゃっとやられたとき何と感ずるかということだ。(フランドン農学校の豚)

(43)の「どしゃっ」は定着した慣習的なオノマトペではない。(43)のコンテクストでこの非慣習的なオノマトペに対応すると考えられる慣習的なオノマトペは「びしゃっ」であろう。したがって、このユニークな「どしゃっ」は、慣習的な「びしゃっ」から/bi/ → [do]というモーラ交替によって派生したと仮定できる。非慣習的な「どしゃっ」と慣習的な「びしゃっ」を比べてみると、「びしゃっ」は、鋭い比較的澄んだ音を表し、棒が豚の背中に当ったとき、表面的に接触して接触時間も短く感じられる。一方、「どしゃっ」は、「びしゃっ」よりも鈍い音を表し、棒が豚の背中に当ったとき、接触時間が長くより痛みを感じるようななぐり方をイメージさせる。

3.4 挿入

慣習的なオノマトペから非慣習的なオノマトペを派生したと仮定できる音韻現象として、音の挿入が挙げられる。

3.4.1 促音挿入

慣習的なオノマトペに促音が挿入されて派生したと思われる、非慣習的なオノマトペがいくつか賢治の作品に見られる。

(44) おまえのこしかけぬれてるぞ、霧、ぽっしゃん、ぽっしゃん、ぽっしゃん、…(かしわばやしの夜)

いいか、もし、来なかったらすぐお前らを巡査に渡すぞ。巡査は首をシュッポンと切るぞ。(カイロ団長)

赤い封縒蝋細工のほおの木の芽が、風に吹かれてピッカリピッカリと光り、…(雪渡り)

(44)の第1モーラの後に促音を持つ「ぽっしゃん」「シュッポン」「ピッカリピッカリ」は、いずれも定着した慣習的なオノマトペではない。これらの非慣習的なオノマトペに対応すると考えられる慣習的なオノマトペは、それぞれ「ぽしゃん」「スポン」「ピカリピカリ」と推測される。したがって、(44)の非慣習的なオノマトペは、促音を含んでいない慣習的なオノマトペから、それぞれ適切な位置に促音を挿入して派生したと仮定できる。なお、

「シュッポン」は、慣習的な「スポン」から促音挿入に加えて/s/ → [ʃ]という硬口蓋化を経て派生したと考えられる。日本語オノマトペには、「ぷつん」「ぷっつん」という慣習的なオノマトペが存在するので、当該促音挿入は、この分布状況の類推の結果であると考えられる。

(45) おしまいの二つぶばかりのダイアモンドがそのみがかれた土耳古玉のそらからきらきらっと光って落ちました。(十力の金剛石)
本線シグナル附きの電信ばしらは、がたがたっとふるえてそれからじっと固くなって答えました。(シグナルとシグナレス)
ブン蛙とベン蛙がくるりと外の方を向いて逃げようとしましたが、カン蛙がピタリと両方共とりついてしまいましたので二疋のふんばった足がぷるぷるっとけいれんし、… (蛙のゴム靴)

(45)のオノマトペは、いずれも2モーラ反復形の語末に促音を伴っており、日本語オノマトペの典型的な音韻形態である2モーラ反復形のオノマトペから、語末に促音を付加して派生したと考えられる。実際、この促音を伴った2モーラ反復形は、慣習的な反復形の強調形とも呼ぶべき異形態と考えられ、賢治の作品に多数見られる。このように、(45)の「きらきらっ」は「きらきら」から派生されたと考えられるものの、もう一つの可能性として、「きらきらっ」は反復形の「きらきら」ではなく、「きらっ」という非反復形のオノマトペから、語基、すなわち最初の2モーラ(「きら」)が繰り返されて派生したとも考えられる(那須(1999)参照)。

(46)が示すように、同じ２モーラ反復形を持つオノマトペでありながら、(45)とは異なった位置に促音が挿入されているものもある。

(46) 僕は…丘を通るときは草も花もめっちゃめちゃにたたきつけたんだ、… (風の又三郎)
それからおなか中をめっちゃめっちゃにこわしてしまうんだよ。(いちょうの実)

(46)の促音を含むオノマトペは、いずれも2モーラ反復形の慣習的な「めちゃめちゃ」から派生したと考えられる。「めっちゃめちゃ」は第1モーラの後に、「めっちゃめっちゃ」は第1モーラと第3モーラの後に促音が挿入されている。この二つのオノマトペは、いずれも慣習的なオノマトペ「めちゃめちゃ」の異形態であるが、促音を一つ含む前者と、促音を二つ含む後者は、それぞれ当該2モーラ反復形オノマトペの「強調形」、および「超強調

形」と呼ぶべきものと見なせる。

(45)のオノマトペも(46)のオノマトペも、それぞれ2モーラ反復形のオノマトペから派生したと仮定できると述べたが、前者では「きらきらっと光る」のように、語末に促音が付加される。一方、後者では「めっちゃめちゃ」や「めっちゃめっちゃ」のように、促音が第1モーラの後に挿入されたり、第1モーラと第3モーラの後に挿入されたりするのはなぜだろうか。(45)のオノマトペも(46)のオノマトペも、両者とも動詞を修飾する副詞であるが、動詞との関わり方が異なる。すなわち、前者のオノマトペは、いずれも動作の様態を描写する「様態副詞」として機能している。一方、後者のオノマトペは動作の様態ではなく、動詞によって引き起こされた結果の状態を描写する「結果副詞(状態副詞)」として機能している。[(5)] このように、語末に促音を持つ(45)のオノマトペは、様態副詞として機能する2モーラ反復形の異形態であり、(46)の促音が第1モーラの後や、第1モーラと第3モーラの後に挿入された(46)のオノマトペは、結果副詞として機能する2モーラ反復形の異形態である。

3.4.2　撥音挿入

賢治独特と思われる非慣習的なオノマトペには、慣習的なオノマトペから、撥音が挿入されて派生したと仮定できるものがある。

(47) と思うと狐は…ぐんにゃりと土神の手の上に首を垂れていたのです。(土神ときつね)

(47)の「ぐんにゃり」は、定着した慣習的なオノマトペではない。現代日本語では、(47)の「ぐんにゃり」に対応する慣習的なオノマトペは「ぐにゃり」である。したがって、「ぐんにゃり」は「ぐにゃり」から第1モーラの後に撥音が挿入されて派生したと考えられる。非慣習的な「ぐんにゃり」は、撥音が挿入されることによって、慣習的な「ぐにゃり」よりも、「柔らかで簡単に折れ曲がってしまうさま」をより強く表す、いわば「ぐにゃり」の強調形のように感じられる。

3.4.3　母音挿入/長母音化

賢治の作品の中に、慣習的なオノマトペに母音を挿入したり、母音を長音化したりして派生したと思われる非慣習的なオノマトペが見られる。

(48)「かあお、ずいぶんお待ちしたわ。いっこうすかれなくてよ。」(烏の北斗七星)

…スルスル光のいとをはき、きいらりきいらり巣をかける。（蜘蛛となめくじと狸）

「からすかんざえもんはくろいあたまをくうらりくらり、とんびとうざえもんはあぶら一升でとうろりとろり、…（かしわばやしの夜）

(48) のオノマトペは、明らかにいずれも定着した慣習的なオノマトペと見なされない。「かあお」は烏の鳴き声を描写しているが、慣習的なオノマトペは「かあ」である。「きいらりきいらり」も、「きらりきらり」と対応していると考えられる。また、「くうらりくらり」や「とうろりとろり」は、それぞれ「くらりくらり」「とろりとろり」と対応していると考えられる。このように、「かあお」は「かあ」に「お」を付加して、「きいらりきいらり」は「きらりきらり」から「き」に含まれている母音/i/を長音化して、そして「くうらりくらり」と「とうろりとろり」は、それぞれ「くらりくらり」と「とろりとろり」から、第1モーラに含まれている母音/u/を長音化して派生したと仮定できる。

4.4.4　モーラ挿入・反復

3.4.1から3.4.3では、慣習的なオノマトペに、促音・撥音・母音を挿入して派生したと考えられる非慣習的なオノマトペについて検討したが、以下では、単音ではなく、モーラが挿入・反復されて派生したと仮定できる非慣習的なオノマトペについて検討する。

(49)「ら」挿入・反復

「はんの木のみどりみぢんの葉の向さぢゃらんぢゃららんのお日さん懸がる。」（鹿踊りのはじまり）

(49)の「ぢゃらんぢゃららん」は、明らかに日本語として定着していない、非慣習的なオノマトペであり、慣習的な「ぢゃらんぢゃらん」から「ら」というモーラを末尾の「らん」の前に挿入・反復して派生したと思われる。

(50)「り」挿入・反復

…恭一はからだがびりりっとしてあぶなくうしろへ倒れそうになりました。（月夜のでんしんばしら）

(50)の「びりりっ」も、日本語の慣習的なオノマトペではなく、慣習的な「びりっ」から「り」を挿入・反復して派生したと考えられる。

(51)「る」挿入・反復

するとテねずみはぶるるっとふるえて、目を閉じて、小さく小さくちぢまりましたが、…（クンねずみ）

大烏は…一寸眼をパチパチ云わせてそれからブルルッと頭をふって水を払いました。（双子の星）

すると不意に、空でブルルッとはねの音がして、二疋の小鳥が降りて参りました。（貝の火）

(51) の非慣習的な「ぶるるっ/ブルルッ」は、(50) の非慣習的な「びりりっ」と同じ音韻形態を持っている。この非慣習的なオノマトペも、CVCVQという形態の慣習的なオノマトペ「ぶるっ/ブルッ」から、第2モーラの「る」をその後に挿入・反復して派生したと仮定できる。

3.4.5　反復

最後に、慣習的なオノマトペから非慣習的なオノマトペが派生したと仮定できる音韻現象として、反復を挙げることができる。日本語では、連続した音や動作、ないし繰り返しの音や動作を描写するのに、反復形が用いられるが、その形態は、繰り返される回数に関係なく、「ごろごろ」のように、語基が1度だけ繰り返された形態になるのが普通である。ところが、賢治は、「ごろごろごろ」や「ごろごろごろごろ」のように、語基を2度、3度と反復させた非慣習的なオノマトペを作品の中で頻繁に用いている。

(52) CVCV x 3

水をたして、あとはくつくつくつと煮るんだ。（水仙月の四日）

蟹の子供らもぽつぽつぽつとつづけて五六粒泡を吐きました。（やまなし）

(53) CVCV x 3 + Q

蜘蛛はキリキリキリッとはがみをして云いました。（蜘蛛となめくじと狸）

ツェねずみはプイッと入って、ピチャピチャピチャッと喰べて、…（「ツェねずみ」）

(52)のオノマトペは、「くつ」および「ぽつ」といった語基を2度繰り返してつくられた非慣習的なオノマトペで、(53) のオノマトペは、語基を2度繰り返して、さらに促音を付加した形態の臨時オノマオトペである。

「ごろごろ」のような語基が1度だけ繰り返された慣習的なオノマトペ以外では、(54)の

ような語基が3度繰り返された形態が、賢治の作品の中に一番多く見られた。

(54) がたがたがたがたふるえだして、もうものが言えませんでした。(注文の多い料理店)
六疋ばかりの鹿が、さっきの芝原を、ぐるぐるぐるぐる環になって廻っているのでした。(鹿踊りのはじまり)

(54)の「がたがたがたがた」「ぐるぐるぐるぐる」は、それぞれの語基である「がた」「ぐる」が3度繰り返されて派生したように思われるが、実際はそうではなくて、「がたがた」「ぐるぐる」といった2モーラ反復形の慣習的なオノマトペが反復した形態であると考えた方がよさそうである。

さらに、「キシキシキシキシキシッと高く高く叫びました(よだかの星)」のように、語基が4回繰り返されたものまである。もちろん、CVV、CVQ、CVN、といったCVCV以外の語基が2度、3度繰り返された形態も、少なからず用いられている。

4　おわりに

本稿では、賢治特有のユニークな非慣習的なオノマトペのうち、慣習的なオノマトペから、音の交替、挿入、反復といった音韻プロセスを経て派生したと仮定できる非慣習的なオノマトペについて考察した。

第2節において、慣習的な日本語オノマトペの一般的な音韻形態として、1モーラを基本形に持つものと、2モーラを基本形に持つものを、賢治が実際に彼の作品の中で用いている例を1例ずつ挙げた。

第3節では、慣習的なオノマトペから、さまざまな音韻プロセスを経て派生したと考えられる賢治の非慣習的なオノマトペについて検討した。まず、3.1で慣習的なオノマトペから、非慣習的なオノマトペを導く音韻現象として、子音交替が関与している例を挙げた。子音交替には、有声子音を無声子音に変える「無声化」と、無声子音を有声子音に変える「有声化」の2種類の子音交替について言及した。例えば、(12)の「こくっと息を呑みながら…」の「こくっ」といった非慣習的なオノマトペは、「ごくっ」といった慣習的なオノマトペから/g/ → [k]という無声化現象を通して派生したと考えられる。同様に、(16)の「時計ががちっと鳴りました」の「がちっ」という非慣習的なオノマトペは、「かちっ」という慣習的なオノマトペから、/k/ → [g]という有声化現象を通して派生したと仮定できる。このような無声化・有声化現象はk ⇔ gやp ⇔ bといった閉鎖音に特に顕著に見られる。

次に、子音交替の別の例として、硬口蓋化について言及した。硬口蓋化が関与している

例として、(18)の「どの幽霊も青白い髪の毛がばしゃばしゃで…」を取り上げ、非慣習的な「ばしゃばしゃ」が、慣習的な「ばさばさ」から、歯摩擦音の/s/を硬口蓋歯茎摩擦音の[ʃ]に変える硬口蓋化を経て派生したと仮定できるということを述べた。

さらに、子音交替の例として、(20)の「ツェ鼠はプイッと中へ入って、むちゃむちゃと半ぺんをたべて」を挙げて、破擦音化について言及した。非慣習的な「むちゃむちゃ」は、慣習的な「むしゃむしゃ」から、摩擦音の/ʃ/を破擦音の[tʃ]に変える/ʃ/ → [tʃ]という破擦音化現象を通して派生したと仮定される。

子音交替の別の例として、摩擦音化と非硬口蓋化について言及した。前者の例として、(21)の「…あらんかぎり首を延ばしてふんふん嗅いでいましたが、…」を取り上げた。現代日本語では、非慣習的オノマトペと見なされる「ふんふん」が、慣習的な「ぷんぷん」から、閉鎖音の/p/を摩擦音の[h]に変える摩擦音化現象を通して派生したと仮定できる。後者の例として、(22)の「…空の桔梗のうすあかりには、山どもがのっきのっきと黒く立つ。」を取り上げて、非慣習的な「のっきのっき」が、慣習的な「にょきにょき」から、硬口蓋鼻音/ɲ/を歯茎鼻音[n]に変える非硬口蓋化および促音挿入を経て派生したと仮定できることを見た。

次に、3.2で母音交替が関与していると仮定できる例について検討した。賢治の作品には、非慣習的なオノマトペの派生に関与していると思われる母音交替が多数見られる。まず、母音/u/が別の母音と交替する例として、賢治の作品に見られた/u/ → [o]、/u/ → [i]、/u/ → [e]の3種類について言及した。/u/ → [o]の例として、(23)の「三疋はぽかぽか流れて行くやまなしのあとを追いました。」を挙げ、非慣習的な「ぽかぽか」が、慣習的な「ぷかぷか」から/u/ → [o]という母音交替を通して派生したと仮定できると述べた。/u/ → [i]の例として、(24)の「めくらぶどうは、まるでぶなの木の葉のようにプリプリふるえて、…」を取り上げて、非慣習的な「プリプリ」は、ふるえるという動詞と共起する慣習的な「プルプル」から/u/ → [i]という母音交替を通して派生したと仮定できることを見た。最後に、/u/ → [e]の例として、(25)の「殊に狸はなめくじの話が出るといつでもヘンと笑って云いました。」を取り上げ、非慣習的な「ヘン」が慣習的な「フン」から、/u/ → [e]という母音交替によって派生したと仮定できることを述べた。

次に、母音/a/が別の母音と交替する例として、/a/ → [o]、/a/ → [e]、/a/ → [i] 、/a/ → [u]の4種類について言及した。まず、/a/ → [o]の例として、(26)の「けれどもぼくは、…やっぱりぽくぽくそれをたべていました。」が挙げられるが、非慣習的な「ぽくぽく」が慣習的な「ぱくぱく」から/a/ → [o]という母音交替を経て派生したと仮定できる。/a/ → [e]の例として、(27)の「とうとう三疋共頭がペチンと裂けたことでも何でもすっかり出ているのでした。」が挙げられ、非慣習的な「ペチン」は、「パチン」から/a/ → [e]と

いう母音交替を経て派生したと仮定できる。次に、/a/ → [i]の例として、(28)の「とのさまがえるは次の室の戸を開いてその閉口したあまがえるを押し込んで、戸をぴたんと閉めました。」を取り上げて、非慣習的な「ぴたん」が、慣習的な「ぱたん」と「ぴたっ」を組み合わせてつくられたのではないかということを述べた。「ぴたん」が「ぱたん」から派生したと仮定すれば、/a/ → [i]という母音交替が関わっていることになるが、「ぴたん」が「ぴたっ」と関連していると仮定すれば、「ぴた」という語基に撥音が付加されて、非慣習的な「ぴたん」がつくられたと考えられる。最後に、/a/ → [u]の例として、(29)の「私はちらっと下を見ましたがもうくるくるしてしまいました。」を挙げて、「くるくる」が「くらくら」から、/a/ → [u]という母音交替プロセスを経て派生したと仮定できるということを述べた。

母音/i/が別の母音と交替していると思われる例が、賢治の作品に、/i/ → [e]、/i/ → [a]、/i/ → [u]の3種類が見られた。/i/ → [e]の例として、(30)の「…蝋燭の火のように光ったり又消えたりぺかぺかしているのを見ました。」が挙げられるが、非慣習的な「ぺかぺか」は慣習的な「ぴかぴか」から/i/ → [e]という母音交替によって派生したと考えられる。しかしながら、「ぺかぺか」は岩手方言のオノマトペで、同方言では、光ったり消えたりする、点滅する光り方を描写するのに「ぺかぺか」が用いられ、連続した光り方を描写する「ぴかぴか」と区別しているようである。/i/ → [a]の例としては、(32)の「実際それを一ぱいとることを考えると胸がどかどかするのでした。」や「間もなくパリパリ呼子が鳴り汽缶車は一つポーとほえて、汽車は一目散に飛び出しました。」を取り上げて、「どかどか」と「パリパリ」は、それぞれ慣習的なオノマトペ「どきどき」と「ピリピリ」から、/i/ → [a]という母音交替を経て派生したと仮定できると述べた。しかし、「どかどか」も賢治独特の非慣習的なオノマトペではなく、東北方言の可能性があると述べた。/i/ → [u]の例として、(33)の「「みなさんお早う。どなたも元気ですね。」と云いながら笛を口にあててピルルと吹きました。」と「先生はちらっと運動場中を見まわしてから「ではならんで。」と云いながらプルルッと笛を吹きました。」を取り上げて、非慣習的な「ピルル」と「プルルッ」がそれぞれ「ピリリ」と「ピリリッ」から、/i/ → [u]という母音交替によって派生したと仮定できると述べた。

母音交替の別の例として、/o/が別の母音と交替する/o/ → [u]、/o/ → [a]、/o/ → [e]について言及した。/o/ → [u]が関与している例は、(34)の「雪童子はわらいながら、手にもっていたやどりぎの枝を、ぷいっと子どもになげつけました。」であるが、非慣習的な用法である「ぷいっ」は、慣習的な「ぽいっ」から/o/ → [u]という母音交替を通して派生したと考えられる。/o/ → [a]の例としては、(35)の「それでもやっぱりキッコはにかにか笑って書いていました。」が挙げられる。現代日本語では、非慣習的であると見な

される「にかにか」は、慣習的な「にこにこ」から、/o/ → [a]という母音交替を経て派生したと仮定できるが、「にかにか」がプラスのイメージの笑い方を描写する東北方言であるという指摘もある。/o/ → [e] が関与している例は、(37)の「いや、ありがとう、ウーイ、ケホン、ケホン、ウーイうまいね。どうも。」で、「ケホン」が「コホン」から、/o/ → [e]という母音交替によって派生したと考えられる。

母音交替の最後の例として、(38)の「ごくとしよりの馬などは、わざわざ蹄鉄をはずされて、ぼろぼろなみだをこぼしながら、その大きな判をぱたっと証書に押したのだ。」を取り上げて、非慣習的な用法である「ぱたっ」が慣習的な「ぺたっ」から、/e/ → [a]という母音交替を経て派生したと仮定できることを述べた。

3.3では、子音や母音といった単音ではなく、CVというモーラ交替について検討した。まず、/pyo/が別のモーラと交替する例として、/pyo/ → [pu]が見られた。このようなモーラ交替が関わっている例は、(39)の「大砲をうつとき、片脚をぷんとうしろへ挙げる艦は、…」で、非慣習的な「ぷん」が、慣習的な「ぴょん」から/pyo/ → [pu]というモーラ交替を経て派生したと仮定できる。

モーラ交替の別の例として、/kyo/ → [ki]および/gyo/ → [gi]という、よく似た二つの交替が見られた。/kyo/ → [ki]と/gyo/ → [gi]というモーラ交替は、それぞれ(40)の「その人は大へん皮肉な目付きをして式場全体をきろきろ見下ろしてから云いました。」と(41)の「…大きな眼をぎろぎろ空に向けしきりに口をぱくぱくして…」に見られた。(40)の「きろきろ」は「きょろきょろ」から、そして(41)の「ぎろぎろ」は「ぎょろぎょろ」から、それぞれ/kyo/ → [ki]と/gyo/ → [gi]というモーラ交替プロセスを経て派生したと仮定できる。

また、/kyu/ → [ki]というモーラ交替が関与していると考えられる例として、(42)の「仕立おろしの紺の背広を着、赤革の靴もキッキッと鳴ったのです。」が見られた。(42)のようなコンテクストにおいて非慣習的と見なされる「キッキッ」は、「キュッキュッ」から/kyu/ → [ki]というモーラ交替プロセスを経て派生したと仮定される。モーラ交替の最後の例として、/bi/ → [do]という、音韻的に珍しい現象が、(43)の「最想像に困難なのは、豚が自分の平らなせなかを、棒でどしゃっとやられたとき何と感ずるかということだ。」に見られた。(43)のコンテクストでこの非慣習的な「どしゃっ」に対応すると考えられる慣習的なオノマトペは「びしゃっ」であるので、「どしゃっ」は慣習的な「びしゃっ」から、/bi/ → [do]というモーラ交替によって派生したと仮定できる。

3.4では、慣習的なオノマトペから、賢治特有の非慣習的なオノマトペを派生する音韻現象として、挿入が関与していることを示した。挿入現象には、促音挿入、撥音挿入、母音挿入、モーラ挿入の4種類が見られた。まず、促音挿入の例として、(44)の「赤い封縫

蝋細工のほおの木の芽が、風に吹かれてピッカリピッカリと光り、…」が挙げられるが、促音を含む「ピッカリピッカリ」という非慣習的なオノマトペは、促音を含んでいない「ピカリピカリ」という慣習的なオノマトペから、適切な位置に促音を挿入して派生したと仮定できる。また、(45)の「おしまいの二つぶばかりのダイアモンドがそのみがかれた土耳古玉のそらからきらきらっと光って落ちました。」および(46)の「僕は…丘を通るときは草も花もめっちゃめちゃにたたきつけたんだ、…」に見られるように、「きらきら」という様態副詞として機能する慣習的なオノマトペの強調形、および「めちゃめちゃ」という結果副詞として機能する慣習的なオノマトペの強調形とも呼ぶべき「きらきらっ」や「めっちゃめちゃ」といった異形態が、それぞれ適切な位置に促音が付加・挿入されて派生したと考えられる現象についても言及した。

撥音挿入の例として、(47)の「と思うと狐は…ぐんにゃりと土神の手の上に首を垂れていたのです。」が挙げられるが、非慣習的な「ぐんにゃり」は「ぐにゃり」から、第1モーラの後に撥音が挿入されて派生したと考えられる。母音挿入が関与している例は、(48)の「かあお、ずいぶんお待ちしたわ。いっこうすかれなくてよ。」のような例に見られる。明らかに非慣習的なオノマトペである「かあお」は、慣習的な「かあ」に母音/o/を付加して派生したと仮定できる。

モーラ挿入・反復の例として、まず、(49)の「はんの木のみどりみぢんの葉の向さぢゃらんぢゃららんのお日さん懸がる。」が挙げられる。「ぢゃらんぢゃららん」は、明らかに定着していない非慣習的なオノマトペであり、慣習的な「ぢゃらんぢゃらん」から「ら」というモーラを末尾の「らん」の前に挿入・反復して派生したと思われる。(50)の「…恭一はからだがびりりっとしてあぶなくうしろへ倒れそうになりました。」と(51)の「するとテねずみはぶるるっとふるえて、目を閉じて、小さく小さくちぢまりましたが、…」という例の「びりりっ」と「ぶるるっ」は、いずれも非慣習的なオノマトペで、慣習的な「びりっ」と「ぶるっ」から、それぞれ「り」と「る」を挿入・反復させて派生したと仮定できる。

3.5では、慣習的なオノマトペから非慣習的なオノマトペを派生したと仮定できる音韻現象として、反復について言及した。2モーラの語基を2度反復させた例が、(52)の「水をたして、あとはくつくつくつと煮るんだ。」と(53)の「蜘蛛はキリキリキリッとはがみをして云いました。」のような文に見られた。なお、(53)のオノマトペは、語基を2回繰り返して、さらに促音を付加した形態の臨時オノマオトペである。また、語基が3回繰り返された例として、(54)の「がたがたがたがたふるえだして、もうものが言えませんでした。」を挙げたが、実際、「ごろごろ」のような語基が1度だけ繰り返された慣習的なオノマトペ以外では、(54)のような語基が3度繰り返された形態が、賢治の作品の中に一番多く見ら

れた。(54)の「がたがたがたがた」は、語基である「がた」が3度繰り返されているように思われるが、「がたがた」という2モーラ反復形の慣習的なオノマトペが反復した形態であると考えられる。

最後に、オノマトペおよび音象徴に関する、宮澤賢治の鋭い感性について言及しておこう。本稿で述べた、賢治が彼の作品の中で使っている、独特の非慣習的なオノマトペは、慣習的なオノマトペを最大限に利用して、様々な音韻現象を通して創造したものである。賢治がこのような独自の非慣習的なオノマトペを派生する際、単に慣習的なオノマトペの構成音を、一部適当に変化させていたのではない。各音の音象徴的な意味の違いを認識し、それぞれの音象徴効果を意識して、音を変化させていたかどうかは、知る由もないが、少なくとも、各音の音象徴的な意味の違いを直感的に感じとって、音を体系的に変化させていたと思われる。例えば、子音の無声化および有声化に関して、有声のオノマトペの方が無声のオノマトペよりも、関わっている音やものが大きかったり、関わっている動作がより活発であったり、関わっている動作や状態の程度がより激しかったりというようなニュアンスの違いがあるが、賢治は、このような有声と無声の音象徴的な相違を直感的に理解していて、卓越した感性に基づいて、無声化や有声化を通して独自の非慣習的なオノマトペを派生したと考えられる。母音交替に関しても同様で、「ぱくぱく食べる」といった慣習的な表現から、「ぽくぽく食べる」という非慣習的な表現をつくり出しているが、この場合でも、「外への拡がり」や「全体」という意味を示唆する/a/と、「内包」や「部分」といった意味を示唆する/o/の音象徴的な意味の違いを意識していたかどうかは定かではないが、その相違を直感的に感じとっていたと推察される。実際、/a/と/o/以外に、音象徴的な意味的相違を考慮に入れて、独自のオノマトペを派生したと仮定できる音韻現象が、賢治の作品の随所に見られた。

以上のように、宮澤賢治は偉大な文学者であるが、音に対して並外れた鋭い感性を持っており、オノマトペに関しては、特に優れた直感の持ち主で、「オノマトペの達人」と呼ぶに相応しい偉大な言語学者でもあったと言えるだろう。

【注】

(1)　賢治独特の非慣習的なオノマトペについては、田守(2002)、田守(2004)を参照されたい。

(2)　慣習的なオノマトペから、音韻変化によって派生したと仮定できる非慣習的なオノマトペには、賢治が独自につくったオノマトペだけでなく、岩手方言や東北方言のオノマトペが含まれている可能性がある。しかしながら、このような方言のオノマトペも、いわゆる共通語としては慣習的なオノマトペではないので、本稿では便宜上非慣習的なオノマトペとして取り扱う。

(3)　CとVはそれぞれ子音と母音を指す。

(4)　川越(2008)によると、宮城県北西部では「心臓がどきどきする」という意味で「胸がどがどがんなった」

という言い方をするそうである。この場合、単に「胸がどきどきする」のではなく、「落ち着きがない」という意味を含んでいるそうである。したがって、(31)の「どかどか」は、いずれも興奮していて落ち着きのない状態を描写していると考えられる。

(5)　様態副詞と結果副詞の相違に関する詳しい議論は(Takahara（1975-76)、Tamori（1984)、田守・スコウラップ(1999)、田守(2002)、田守(2008)を参照されたい。

【参考文献】

Hamano, Shoko（1998）*The Sound-Symbolic System of Japanese.* Tokyo:Kuroshio.

井上ひさし(1984)『私家版　日本語文法』新潮文庫.

筧壽雄(1993)「文学に見られるオノマトペ表現の日英対照」筧壽雄・田守育啓(編)『オノマトピア・擬音・擬態語の楽園』127-146.勁草書房.

川越めぐみ(2008)「東北方言的宮澤賢治オノマトペ考察」『国文學』53.14:107-115.

三島由紀夫(1959)『文章読本』中公文庫.

那須昭夫(1999)「重複形オノマトペの韻律構造」『大阪外国語大学論集』25:115-125.

小野正弘(2007)『日本語オノマトペ辞典』小学館.

島実(1960)「日本語におけるオノマトペアの位置と岩手の方言」民研岩手班調査資料10（教育図書館私家版).

Takahara, Kumiko（1975-76）"Stative and Manner Adverbs in Japanese," *Papers in Japanese Lingusitics* 4:167-179.

Tamori, Ikuhiro（1984）"Japanese Onomatopoeias: Manner Adverbials vs. Resultative Adverbials," *Jumbun Ronshu* 20.2:51-66, Kobe University of Commerce.

田守育啓(2002)『オノマトペ　擬音・擬態語をたのしむ』岩波書店.

田守育啓(2004)「宮澤賢治のオノマトペ」影山太郎・岸本秀樹(編)『日本語の分析と言語類型』柴谷方良教授還暦論文集 199-213.くろしお出版.

田守育啓(2008)「オノマトペの体系性」『国文學』53.14:70-79.

田守育啓・ローレンス・スコウラップ(1999)『オノマトペ―形態と意味―』くろしお出版.